

## はじめに

いま、障害児の後期中等教育（青年期教育）に対する父母の期待は大きなものとなってきた。それは、養護学校高等部の設置が定着して、卒業後の社会参加とかかわる課題が高等部教育に求められるからである。

一方、高等部への希望者全入がほぼ実現してくると共に、生徒の実態として障害種別や発達段階の重層化による格差の拡がりが増え、実践上の困難点も増えてきていることも事実である。

こうした現状であればあるほど、高等部教育は、個々の生徒の発達課題を科学的に把握し、障害に基づく種々の困難を自ら克服できる力をつけて社会参加させなければならない。

本校高等部では、このような社会的背景をふまえつつ、教育目標を「自ら学ぶ気力にあふれた子」の育成としてきた。

また、本年度は、これらの課題や教育目標を達成するためには、格別、小・中学部での生活経験を蓄積しながら到達した「青年期の発達の特徴」をふまえた取り組みとすることを重視してきた。

特に、「社会参加」をめぐるのは、企業に対応して「働かされる」というのではなく、卒業後のあらゆる生活場面で「働きたい」という意欲をもって立ちむかっていく生徒に育てることの重要性を論議してきた。

これらは、私たち教師集団が、「どんなに重度の障害を持つ子どもでも必ず発達する」という点に確信をもち、どの生徒も社会の成員として生きる人間の育成をめざした取り組みとする必要を認識してきたことによる。

以下の研究実践の中でも、課題別学習集団の編成への工夫や、どの子ども「活動しきる」学習をめざした「授業づくり」などに、その一端を示すことはできたが、その背景に児童生徒会活動や部活動などの中で培った「自治能力」の形成が大きな役割をはたしていることもご理解いただきたい。

### 【1】 高等部の教育課程編成上の特徴と指導の基本姿勢

教育課程全般を規定する週時程については、右の表の通りであるが、本年度、時間編成の上で制約があり、大きな変更はできなかつたが、数学、国語を新たに「教科学習」としての扱いとした。また、従来からの職業、保体、音楽、養護・訓練とともに、「学習集団」のあり方を「課題別」グループ編成とした。それは、学習内容を個別目標にできるだけ近く対置し、発達課題にそった活動をさせるための創意と工夫をこらそうとしたことによる。

図-1 高等部の週時程表

	月	火	水	木	金	土
1	学級会		朝の活動			
2	生活	生活	生活	生活	職	生活
3	数	職	生活	国	職	生活
4	数	職	生活	国	職	
5	音A 体B	クラブ	生活 (奉仕)	職 (紙工)	音B 体A	
6	音B 体A	委員会		職 (紙工)	音A 体B	

また、本校が重視してきた“小・中・高12か年一貫教育の推進”の方針に沿って教育内容の系統性を追究したことである。特に、この点で高等部では「あそび」から発展した「労働」の位置づけを明確にして（具体的には「職業科」の項で詳述する）「職業科」（労働教育）の実践を重視し「社会参加」の課題に答えようとした。

なお、言うまでもないが、教育課程の各教科・領域で育つ力の総体として生徒の人格形成がなされ、教育目標の「自ら学ぶ気力にあふれた子」が達成されるものとする。

次に、研究実践の中心となった各教科・領域について限定して、その指導方針の概要をのべておくことにする。

## 〔1〕運動場面としての教科・領域

高等部の生徒は、あらゆる取り組みの基礎となる「からだ」そのものについて、多様な発達の過程を通して（なかには障害のためにゆがんだままの発達をしている）現在に至っており、その克服が非常に困難な状態にあるものもいる。

私たちは、この現状を重視しながら以下の方針をもって指導してきた。

1. 保健体育科（具体的な内容としては、基本の運動・陸上・水泳・なわとび・球技等）
  - ・運動経験を少しでも増やし、身体を動かすことの喜びやその運動の楽しさを味わう。
  - ・運動経験を積み重ね、運動技能の向上と運動機能の促進を図る。特に、発達段階の低位な生徒には、運動を通して集団としての意識や適応力を養うとともに、健康の増進や体力の向上を図ることに留意した。
  - ・集団でのゲームでは、特にルールやきまりを体得させることで社会的適応力の育成や仲間と協力する大切さ等の社会性を養い、障害者の「生涯スポーツ」の創造をめざす。

### 2. 養護・訓練

<課題別トレーニング——5グループに分けて>

- ・微細運動を巧みに行うための大筋群の協応性の形成と動的バランス能力の向上
- ・筋力強化と運動量の確保による「肥満」の軽減
- ・からだの調整力や筋力の向上
- ・軀幹を後屈させるという非日常的な運動をも経験させる。
- ・運動を楽しみながら、集団と関わる中で敏捷性等を高める。

<10分間走——全員>

- ・筋力、全身持久力、心肺機能の向上を図る。
- ・走ることの意識の向上や日々の努力の積み重ねの大切さ、競争心、粘り強さを体得する。
- ・自らの目標を明確にして、その目標の達成にむかって根気よく努力する力を培う。

## 〔2〕生活場面としての教科・領域

### 1. 生活一般

「生活者としての力をつける」——その中核にある学習形態が「生活一般」である。この「生活一般」は、基礎集団である「学級集団」を単位に、「行事単元学習」と呼ぶ生活単元的な学習形態と「生活的教科学習」（社会科、美術、技術家庭等）と呼ぶ生活的、実践的な教科学習の2本の柱からなる。ねらいとしては、学級集団の中で友だちとかかわり、楽しんで行事に取り組み、生き生きと活動する態度や意欲を育てる。第2には、生活につながる経験や体験の中から教科的知識を体得したり、健康管理・増進のための知識を身につけることなどをねらいとしている。

### 2. 職業（コース別<技能・制作・作業>・紙工<合同>・校内職業実習・現場実習）

「社会参加」を前にした高等部の生徒にとって「働くことを学ぶ場」（職業科）を経験させることは、卒業後の職場や家庭や地域といったすべての生活の場で必須のものである。そのために今年度は格別、教育課程の中でも重視して取り組んできた。

また、青年期にさしかかった生徒の発達的な特性の面からも、労働的要素の強い教材の配置が従来、苦手としたものを獲得する可能性をも示唆しているのである。たしかに、生徒の中には自分の進路を意識したり実社会での労働を見通す力をつけてきている生徒から、自分の行っている作業の目的を明確に意識できない生徒まで存在する。

それだけに、個々の生徒の課題に応じた目標を設定することが重要であるとともに、本来「労働」については、目的の見通しやすい活動内容を多様に含んでいることに着目でき、全ての生徒の意欲を引き出すことができると考える。

昨年までの高等部の職業科の目標は「意欲面の向上とともに、技術の向上、作業態度の育成」としてきたが、これは現実に事業所で就労することになる生徒にとっては、重要な社会からの要請であり、今年度も継承して取り組んできた。その上で、今年度は、「社会参加」の定義を広げて、「働く」ことのもつ意義を細分化し、自主的に「労働」にかかわる力を育てたいという願いをこめて、職業科の「めあて」を次のように定めて研究実践をすすめてきた。

- ・自分から作業にかかわり、意欲的に行動する自主性を培う。
- ・友だちや道具、自分の目標に合わせて、自分の欲求や要求、感情等を調整する力を育てる。
- ・友だちや先生等に、自分の考えや意思、要求を表現できる力を育てる。
- ・作業の中で、道具を工夫したり選んだり、自らで判断する力を育てる。
- ・生産（製作）過程の中で「納期」等を理解し、目的を見通す力をつける。
- ・道具や機械を操作する力の向上をめざす。
- ・自分の行動に気づいたり、まちがいや失敗を確認し、それを訂正したり報告できる力までたかめる。